

第22回日本がん免疫学会総会 ― 宴から原点へ ― の開催報告

The 22nd Annual Meeting of Japanese Association of Cancer Immunology : From the Banquet to the Beginning

会長 鶴殿平一郎 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 免疫学)

Heiichiro Udon (Department of Immunology, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences)

2018年8月1日(水)～3日(金), 第22回日本がん免疫学会総会を岡山コンベンションセンターにて開催いたしました。本大会は鶴殿を会長に, そして消化器外科学の藤原俊義 教授と呼吸器アレルギー内科学の木浦勝行 教授を副会長として, 一年を通して最も暑い時期でのお迎えになりました。免疫チェックポイント阻害薬やCAR-T細胞療法などの「免疫療法」が実用化された今, がん治療の革新が進むと同時に製薬企業やベンチャー企業の相次ぐ参入に沸き, ある種の高揚感の中に私たちはいます。しかし今一度, 足元を見つめなおし, さらなる進歩に繋げたいという思いから, 敢えて「宴から原点へ」へというキャッチフレーズを携えて大会に臨みました。以下, プログラムに沿って報告いたします。

開催初日, 昨年7月に急逝されました中山睿一 前免疫学分野教授の追悼記念学術講演会 ― Cancer Testis から Mutanome へ ― を午後5時から開始しました。初日にもかかわらず300名を超える方が集まり, 多くの立見席を抱えながらも約3時間にわたる講演会がスタート。三重大の珠玖洋 教授を座長に, 中山先生の生前, 特に親交の深かった, あるいはお世話になった先生方6名のご講演を拝聴。「腫瘍抗原ワクチンから免疫抑制機構の解除」(阪大: 和田), 「がん特異的T細胞を用いた細胞療法の開発」(長崎大: 池田), 「次世代シーケンサーを用いた免疫モニタリング」(東大: 垣見), 「肺がんの免疫監視とバイオマーカー」(川崎医: 岡), 「ネオ抗原によるがんワクチンと制御性T細胞」(コネチカット大: Srivastava), 「メトホルミン研究で学んだこと」(岡大: 鶴殿)と, 最先端のがん免疫学と免疫治療研究の話をお聴くことができました。その後の意見交換会も非常に多くの先生方が参加され, 想い出話を交えた和やかなひと時を過ごしました。

開催2日目, ここからが大会の本番。二つの会場に分

かれて若手研究者全員(約40名)の口頭発表。聴衆に紛れてフロアで静かに審査する5名の先生方の存在と多くの質疑応答が良い緊張感を醸し出していました。今年は一入9分の時間を設け存分に発表してもらい, 若手の顔が見える機会になったと思います。二つのランチョン・セミナーでは, 「複合がん免疫療法の病理と臨床」(札医: 鳥越)と「代謝シグナル分子を標的とした腫瘍免疫学の新展開」(京大: 茶本)と, 新しい切り口でのお話を拝聴しました。次にシンポジウム1 (腫瘍微小環境と免疫制御)では, 「がんの高乳酸環境と免疫制御」(大阪国際がん: 井上), 「T細胞エクソソームと腫瘍微小環境変化」(三重大: 瀬尾), 「制御性T細胞の役割」(国がん: 富樫)など, 腫瘍環境の特殊性を学ぶ良い機会になりました。シンポジウム2 (ネオ抗原同定と免疫治療への応用)では, 「次世代シーケンサーを活用したネオ抗原と抗腫瘍免疫応答の解析」(東大: 松下), 「プロテオゲノミクスによるネオ抗原解析」(札医: 金関), 「TCR レパトアの単一細胞解析から抗原同定へ向けて」(富山大: 岸)と, 最新のがん抗原同定法とワクチンおよび細胞療法への応用の話を聴くことができました。特別講演では, 私の留学時代の恩師, Dr. Pramod K. Srivastava が初日に続き, 圧巻のスピーチを披露してくれました。次世代シーケンサーとMHCクラスIへの結合アルゴリズムをもとに選出した何百本というネオ抗原ペプチドから, 如何にして真に有用なペプチドを選別できるのか, その原理の発見を目指す博士の情熱を十分に知ることができました。ポスター発表では狭い部屋に人が溢れ, 熱い議論を交わしました。日本がん免疫学会の真骨頂とも言える熱気ある1時間でした。懇親会は初日を超える人で満員になり, ご馳走はあっという間に完食。5人の若手研究奨励賞の受賞者がアナウンスされ, 当免疫学教室からは研究員の西田が受賞の荣誉に浴しました。



中山睿一前教授 追悼学術講演会, 多くの立見席と熱気ある雰囲気の中で

開催3日目。朝8時からのモーニング・セミナーは少しきついかないと思いましたが会場は満席、広島大の一戸先生による「がん特異的T細胞療法の新たな課題」および、Crown Bioscience Inc.のDr. Davy Ouyangの「Animal Modeling for Immuno-Oncology Drug Discovery」と歯切れの良いお話を拝聴しました。一般演題では流石に手応えのある発表が多く、成熟した内容の質疑応答が印象に残りました。ランチョンでは慶應大学の曾我朋義教授による「がん代謝」のお話を拝聴。博士は、ヒューマン・メタボロームテクノロジー社を創業した方でもあり、世界一のメタボローム解析技術を駆使してわかった代謝とがんの関係性に関する大変興味深い内容のお話でした。シンポジウム3は日本バイオセラピー学会との合同シンポジウムで、「がん免疫療法 実用化の時代」～あなたが抱く基礎・臨床の課題を皆で考える～を開催。iPadを参加者全員に配って質問を吸い上げ、それに講演者がパネル・ディスカッションで答えるという初めての試みを行いました。演者はT細胞イメージング（東京医科大：横須賀）、CAR-T（山口大：玉田）、肺がん（埼玉医大：各務）、がん免疫療法の現状と課題（福島県立医大：河野）そしてオーバー・ビュー（三重大：珠玖）で、会場は大入り超満員、アンケート結果によれば聴衆の満足度は非常に高かったそうです。シンポジウム4では、「PD-1阻害がん免疫治療におけるT細胞脂質代謝の重要性」(京大：茶本、本庶)、「がん微小環境の代謝制御による免疫チェックポイント阻害薬の治



Dr. Pramod K. Srivastava「有用なネオ抗原同定法」に関する圧巻の講演

療効果増強」(慶應：河上)、「メトホルミンと抗PD-1抗体併用療法における相乗効果の分子メカニズム」(岡大：西田、鶴殿)、「Fueling T cells to Fight Cancer」(Vanderbilt Univ. Jeffrey C. Rathmell)というように、ランチョンから続いて今度は「免疫細胞の代謝」にフォーカスしました。免疫チェックポイント阻害薬の効く人とそうでない人の違いは、もしかしたらその代謝のあり方が問題なのかもしれません。Dr. Rathmellの講演は、免疫代謝の世界的エキスパートとしての迫力が十分に伝わってきました。解糖系の重要性もさることながら、ミトコンドリアの健全性、グルタミン代謝の制御によるT細胞機能の改変など、全く新しい概念を多く聴くことができました。

3日間に及ぶ今回の大会では、620名を超える参加者にお越しいただき、がん免疫分野に対する熱い視線は堅調であることを確認できる大会になりました。老若男女を問わず真摯に勉強したいという姿勢（居眠り皆無）が十分に感じられ、熱気の中にも清流のような時間が過ぎて行きました。最後になりましたが、本大会の準備・運営をご支援いただきました日本旅行を始めとする各企業の方々、演題を提出して下さった先生方、参加者の皆様方、そして教室員に心より御礼を申しあげます。

平成30年8月29日受稿
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
電話：086-235-7187 Fax：086-235-7193
E-mail: udono@cc.okayama-u.ac.jp